

さいたまここに人あり

# 子どもの先には必ず 大人がいる」の思いで



狭山市社会福祉協議会職員・  
ひまわり倶楽部代表

井島美由紀さん

## 支えてくれた 大人へ恩返し

私自身、生きづらい学生生活を送っていて、ポピュラーなことが苦手な先生泣かせの学生でした。でも、いつでも自分を救ってくれる先生や誰かしらの大人がまわりにいたんです。だからここまで来られたという思いが福祉の道に入ったもともとの気持ちです。たくさんの人に支えてもらったので、そのお礼をしながら生きていきたいなと思ったんです。2年ほど幼児教育を経験した後、いまの職場で大人の支援をおこなうようになりまし

た。  
東日本大震災の後、社会福祉協議会の職員として一週間ほど被災地に入って、

福島県相馬市新地町の仮設住宅の方の支援をおこなっていました。新地町は800人くらいの小さい町です。同じ町を継続して支援していきたいという思いで、ひとつの仮設住宅を担当して、そのコミュニティのお手伝いをさせていたできました。最後の一人が出て、その仮設住宅がなくなるまで、私たちも支援をつづけようという方針でした。6年間で36回通いました。

仮設住宅は自治会単位で設けられることが多いのですが、そこは原発事故からちりじりに避難されてきた方たちで子どもさんの多いところでした。隣の人も分からない、知らない人たちがたくさんいるなかで、お茶をお出しすることから始めようということになりました。ただ、子どもたちが大勢いたので、どんどん仲良くなって、「次はクリスマス会をやる

プロフィール 特別養護老人ホームの介護職として高齢者福祉の実践に携わる。10年の現場実践を経て、高齢者の相談窓口を担当し在宅の支援を行ってきた。現在は障害者や児童の相談支援を社会福祉協議会の職員として担当。ボランティア活動として、こども食堂や学習支援を行うひまわり倶楽部の代表を勤める。

う」と子どもたちが企画してクリスマス会や夏祭りをやってきました。

## 地域でも 何かできないか

仮設住宅がなくなっていよいよ支援も終りだというときに、自分たちの地域でも何かできないかなという思いがあつて、子ども支援のために狭山市内で「子ども食堂」を始めました。私は、生活困窮者やなかなか仕事につけない方の支援をする部署で仕事をしてきた時期がありました。でも、そういう方は「自己責任」といわれて、世間の目は厳しかったんです。どうしたらいいか湯浅誠さんに相談したら、「子どもの先には必ず大人がいるので、子どもからやってみなさい。子どもには罪がないから、世間の目はあたたかい」と言われて、「子ども食堂」を教わったんです。それがきっかけでした。

いま、「ひまわり倶楽部」は狭山市内で2カ所の子ども食堂に関わっています。ひとつは、市から委託された生活困窮世帯の子どもたちへの教育支援事業と



タイアップして、毎週土曜日の勉強会の後にごはんを食べてもらおうと2016年4月に始まりました。学習支援の子どもの場です。調理室のドアを開けて子どもたちが音や匂いを感じてもらおう、お母さんがキッチンで煮炊きをするような雰囲気になっています。

## 子ども食堂 ひまわり倶楽部

もうひとつは、同じ年の7月から公民館で月3回、第1、第2、第4日曜日の夜にひらいています。その公民館は夜10時まで開館しているので、よく中高生たちが遅くまで勉強したりしていたんで

す。ご飯も食べないでお菓子や菓子パンをつまんでいたの、家に帰れない事情でもあるのかなと館長さんも心配されていました。何かできないかと連絡をいただいて、最初にまず子どもたちに声をかけてクリームソーダを出すところから始めました。その後、蒸かし芋やおにぎりと進め、だんだん子どもたちと顔見知りになることができました。

毎回45から50人くらいが参加しています。子どもが一緒であれば、おじいちゃんおばあちゃん、近所の人でも大人も無料で食事を提供しています。大人ばかりになってしまうと子どもが来づらくなってしまうので、大体大人と子どもが半々くらいになるようにしています。無料で提供することについてはいろいろな意見もあつたんですが、誰でも参加できると、食育は考えずお腹を満たすことが大事だと思っっているんです。

地域のひとからお米を寄付してもらったり、立派なもののは作れないけど、あるもので作っています。それから年に何回か市内のお祭りなどのイベントに出店して、ボランティアみんなでがんばって焼きそばとベビーカーステラとじゃがバター、30万円を売上げました。会場費や調

味料など買わなければならぬものは、これを少しずつ使っています。

## 必要な子どもに届けるために

日曜日の夜に開催しているのもポイントです。なるべく必要な子どもたちに届けるためには何が必要かなと思うと、場所と時間を工夫していくことだったんです。日曜日の夜って家族揃って団らんする家庭が多いので、日曜日の夜に開催すればそういう家庭の子は来ません。必然的に、支援が必要な子の割合が高くなるように



思いますね。

いまは、子どもさんを見ただけでは貧困はわかりません。みんなスマホは持っていますし、ポロポロの服を着ている子はいないし、きちんとしている子が圧倒的に多いと思います。「絶対的貧困」ではなくて「相対的貧困」というのが、日本のいちばんの課題だと思います。

でも、回を重ねていくと話す内容やしぐさ、食べ方から、なんとなく感じることもあるんです。そこから相談窓口につなげることもあります。そのなかで感じることは、誰にも罪はないということなんです。親ごさんたちも、充分努力したなかで苦しんでおられることが分かります。それが親子関係がうまくいかない原因になっていたりしますし、そこに他者が入ることで親子関係が良くなったり、お母さんが少しホッとできるといいなと思っています。

100人のうち支援が必要な子が1人いればいいんです。もしかしたら今悩まれている方もいるかもしれないけど、「私は悩んでいます」とは言わないので、みんなに混じって来てくれたらいいな。実は、1人の子より99人の方が大事だと考えてるんです。困窮家庭の支援も大事な

んだけど、「この子が大事」という逆排除も生まれてしまう。99人を排除しないで100人で一緒にご飯を食べることで、良い影響を与えることができたらその方がいいと思うようになりました。

## ふえすたで市民に知ってもらおう

開催して丸2年たって、地域でもだいぶ知られてきました。行政からの紹介もありますし、年に1回子ども食堂を知ってもらおうと、「こども食堂ふえすた」を開催しています。今年は5月6日に開催したのですが、招待状をつくってボランティアがポスティングをしました。駄菓子屋、ベビーカーステラ、焼きそば、ポップコーン、飲み物など、すべて無料で提供しました。子どもたちに楽しんでもらえるように、会員のひとがバルーンアートをやったり、みんなで持ち寄った景品でビンゴ大会もしました。市内のこども食堂のことを知ってもらおうパネル展示や、クイズラリーでこども食堂に関わる問題を出したりしました。

主催したのは、市内8カ所で子ども食堂を開催している7団体です。これは自慢できることですが、子ども食堂同士が仲良しで、ひまわり倶楽部でもっているフードバンクの倉庫を活用したり、食材をお互いに譲り合ったり、連携していません。みんなが毎日食堂を開催できないから「次はここでやってるよ」と声をかけたりもしているんです。

## がんばりすぎない ボランティアと

土曜日は20人分なので2人と決めて、ひまわり倶楽部のメンバーで交替してやっています。日曜日の子ども食堂はだいたい10人くらいのボランティアでやっています。メンバー同士も仲よしなので、自分ばかりがんばっている人もいないし、やってない人を指摘しない、そういうところはすごいと思います。

第1日曜日は私一人でやっているので、みんなには手伝うよって心配されるんですけど、会に負担をかけたくなかったのと、スタッフがいっぱいいると入り

づらい子もいるかもしれません。そのかわり、毎回メニューはカレーライスのみ、手順を張り紙して「おばちゃんは何もしません。そのかわり、どうぞ好きなだけ食べていってください」って書いています。手を洗って自分たちでよそって食べて洗ってもらおう。そして、最後にアンケートを書いてもらうんです。私は横で携帯をポチポチいじっているんです。たまに山盛りによそっている子どもたちをちらっと見たりするのが楽しいんです（笑い）。そうすると、子どもの方から「おいしかったよ」「ごちそうさま」と声をかけてくれることもあります。



どうやって子ども食堂を続けていくかは難しいところです。大変なことは、やはりマンパワー。少しでも手伝ってくれる人をどう見つけるか、継続的な人手の確保は悩みです。それから8カ所からもっと増やしていければ良いなと思うんですが、マンパワーの問題で難しいですね。

## 先生たちへ 上手に利用して

福祉と教育って、なかなかうまく連携できない部分もあるんです。でも学校でカンファレンス（懇談）をやると、分かってくれる先生もいるから、やっぱり上手に活用してほしいなと思うんです。私たちは先生のやり方に口出しをするわけではなくて、一つの補填としてお手伝いできればと思っています。先生たちは、福祉の人から言われると「ちょっと言われちゃった」と気にする方もいるかもしれませんが、学習支援や子ども食堂も含めてみんな子どもを見ていこう、そういうふうにご利用してほしいと思います。